世界史学習からアジアを考える
公開授業「インドの植民地化より」

山田　　孝

はじめに

今回の研究テーマ、「国際理解と平和の教育をどうすすめるのか」――《アジアの中の日本》――をどう授業として組み立てるのか考えた時、まっさきに浮かんだのが「アシアはなぜ貧しいのか」という言葉である。この場合、アジアの中からもちろん日本を除外しているのたが……。

アジアはなぜ貧しいのか、確かに今日、アジア諸国の発展はめざましいものがあるのだが、一方で、鶴見良行氏が指摘している様に、「GNPでは成績がいいのだが、実際に具体的に現場で見ると、やはり貧しい人はより貧しくなり、金持ちはより金持ちになっている。」（注1）という現実があるようだ。

こうした、今日のアジアの現実がとこから発生しているのか、その歴史的背景に近付こうというのが、今回の私の公開授業のテーマであった。アジアの中の1つの国である日本が、日常生活の大部分をアジア諸国からの輸入品（食料品や石油を中心として）に依存しており、また、日本からの輸出品（資本の輸出から公害の輸出まで含めて）によって経済が支えられている現実を見る必要がある。その一方で、アジアの歴史や現在についてとれだけ深く理解しているだろうか。今世紀に入ってからは、アジア諸国とも密接な関係もあり、侵略した側の歴史を持つ日本として、この歴史の認識に立つことが、「国際理解と平和」を維持するためにも必要であろう。

こうした認識の上で、アジア（広義のアジア全般）を理解するために、世界史としてどの様にアプローチできるのか考えてみた。これが、今回の公開授業「アシアからみた帝国主義――インドを中心とした植民地化――」である。

1．世界史という科目について

今日のアジアに対する認識を深める前に、世界史という科目について考えてみたい。これは、一方で、世界史の持っている問題性が、アジアを考える上でも必要たからである。

世界史という科目が誕生したのは、1951年（昭和26）であった。従来あった東洋史・西洋史を1つにして世界史という科目が生まれたのである。明治以来、日本の歴史教育が、国史（日本史）、西洋史、東洋史という三区分法をとってきた。この区分法は、明治政府の「脱亜入欧」の思想のもとで、西洋史は日本がヨーロッパに学び、やがてヨーロッパに「追いつき、追いこす」ための学問・教科であり、東洋史は、「ヨーロッパの学問の進歩と連合していく」ために研究の成果をあげるべき対象として位置づけられていた。そして、日本史の研究は、「国体を明らかに」し「愛国心」をも喚起すべきものとされた。

こうした三区分法に対して、世界史という科目の成立は、明治以降の古い歴史観・歴史認識を克服する可能性を含んでいるものであった。

しかし、実際に成立した世界史は、基本的には、東洋史と西洋史との「接合」にしかすぎなかったのではないだろうか。それも、西洋史＝ヨーロッパ史中心、東洋史＝中国史中心というように。しかも近代になればなるほど、日本と世界の歴史も密接になってくるのだが、世界史の中の日本史の取りあつかいが不充分となっている。

こうした、世界史の「課題」については、以前から論議されており、様々な研究が発表され、ここ2～3年でも世界史に関する研究も進んでいる。こうした、世界史が、ヨーロッパ史や中国史中心の歴史観から脱去して、世界の諸地域を「対等」に扱うことが重要である。それも、地域から民衆のレベルで語られる必要がある。世界史という教科の「課題」については、別の機会に述べるとして、今回の公開授業に関して言えば、この地域の民衆レベルからどれだけ、アジアの貧困化の歴史をとらえることができるかどうかということである。それも、ヨーロッパ中心史観におちいらず、アジアの立場に立ってである。

2．アジアの現状を歴史的に理解するために

世界史の「課題」をふまえつつ、アジアの現状を理解するために、公開授業「1時限完結」でどこを取り上げるのか。実際にアジアの現在を作り上げている背景には、植民地による様々な収奪があけられるだろう。19世紀末から20世紀にかけて始まった地球的規模の帝国主義の実態を考えることが、今日の現状理解に通じることになる。帝国主義的侵略により、アジア（アフリカも太平洋地域も）がどの様に、経済的にも文化的にも破壊されていったのか考える必要がある。

しかし、帝国主義による植民地化を一面的にだけとらえると、アジアの否定的側面にしか見えてこない。植民地化された国々は、何もせずに植民地化を受け入れたわけではなく、激しく抵抗し、民族運動を高揚させていった面も見なくてはならない。こうした、民族運動の高まりを理解しなくては、第二次世界大戦後のアジア・アフリカでの独立運動や、今日の非同盟諸国の活躍まで結びつかないであろう。

こうした点を前提にして選んだテーマが、インドの植民地化をそれに供って発生した、民族的抵抗運動「インドの大反乱（セポイの乱）」である。

3．公開授業について

最近の世界史教育の成果は、地域史、民衆史の掘りおこしであろう。今までのヨーロッパ中心史観を廃して、地域から民衆の立場で世界の歴史をとらえ様とするものである。

公開授業の主題も「アジアからみた帝国主義」である。実際問題として、教科書に書かれている帝国主義は、ヨーロッパからみたものが中心である。ヨーロッパの経済的な進展に伴なって生じてきた発展段階としての説明はあるのだが、帝国主義的侵略を受けた側の歴史としては、教科書の記述は充分とは言えない。ヨーロッパ側の帝国主義をアジアの人々はどう受け止め、また、受け止めなかったのか。アジア側の史料からみていかなければならない。そうしなければ、アジア諸国が、帝国主義的侵略をただ受け入れていったというマイナスイメージしか残らないのではないだろうか。こうしたマイナスイメージは、今日のアジアを理解することの足かせとなってはいないだろうか。確かに、たとえば、アヘン戦争における中国人民の抵抗＝平英団の活躍といった記述も見られるのだが、まだ充分とは言えない。

こうした観点に立って、アジアの民衆の立場から、帝国主義的侵略をとらえるために、比較的歴史の動きがダイナミックで、生徒にも受け止めやすい主題＝インドの植民地化を選んだ。

(1) 史料の中から見えてきたこと

授業を組み立てるにあたって、できるだけ身近かにある史料を使って、インドの植民地化にアプローチすることにした。とは言っても、19世紀当時の民衆の側の史料が豊富にあるわけではない。インド人自身の記録としては、ネルーの「父が娘に語る世界史物語」（あかね書房）。これは、わかりやすいという点で要約版の方を史料として配布した。（指導案とプリント史料の抜粋したものは、本稿の最後にまとめてあるので参照してほしい。）それと、現在、インドとイギリスで使用されている高等学校の教科書の抜粋。日本から見た史料としては、教科書（実教出版社世界史四訂版）。現代のインドの資料としては、「河童が覗いたインド」妹尾河童著、新潮社を使用した。

これらの資料の中で重要だったのが、教科書の比較である。イギリス、インドの教科書を読む中で、日本の教科書の問題点も見えてきた。それは、インドの植民地化の過程が、日本の教科書では年号も付いて詳しく説明されているのだが、インドの教科書では、おおまかに流れをおさえるのみで、帝国主義国による侵略への批判が中心となっている。これだけを見ると、日本の高校生の方が、インドの歴史を“詳しく”知っているということになる。しかし、実際にインドについての現状をどれだけ理解しているかは疑問である。この日本の教科書の問題については、訳者の１人中村平治氏も訳者まえがきの中で「日本の世界史教科書は、大学入試向けという事情もあり、事件と年号が押すな押すなの小道具屋のショーウィンドーの趣きが強い。その結果、歴史叙述の問題ははるか後景にしりぞけられてしまい、教科書は文字どおり砂をかむような面白味のないものになっている。」（注２）と指摘しているとおりである。

おわりに

公開授業の内容については、資料プリントが整理しきれずに、資料（５枚）を配布するのに時間を取りすぎて、まとまりのないものになってしまった。授業自体、通常の授業とは違って、１回完結のつもりで行ったものである。しかし、公開授業で説明しきれなかったものは、日常の授業の中で補足していった。このインドの植民地化を考える中で、一般的なアジアの植民地化の問題まで発展させてゆき、さらにその上で、今日のアジアの現状にまで結びつけていくことが課題である。まさに、帝国主義的侵略というで言えば、近代イギリスと近代日本とは同罪である。明治維新以降日本が、同じアジアの１国でありながら、アジア諸国に行ってきたことを、そして、現在も行っていることをもう１度考えてみる必要があるのではないだろうか。

（注１）「いまアジアを考えるI」　三省堂
——アジアはなぜ貧しいか——　鶴見良行編著
（注２）「世界の教科書インド」　帝国書院

高等学校　世界史　学習指導案

指導者　山　田　　孝

１．日時　1993年11月２日（火）　10時～10時50分
２．場所　名古屋大学教育学部附属高等学校
３．クラス　３年A組
４．単元の主題　アジアからみた帝国主義
（大単元は帝国主義の時代）
——インドを中心とした植民地化——
５．単元の指導目標

今日の日本が、アジアと密接に関わっているにもかかわらず、アジアの人々の暮らしや生き方、社会や文化についてはイメージが明確には浮かびあがってはこない。どちらかといえば、貧しさやその歴史を貫くマイナスイメージ（植民民地化の

問題）が強調されるばかりである。

こうしたなかで、「アジアの一員」としての日本は、アジアの多様性を理解しアジアから学ぶ姿勢が必要になってきている。とくに、アジアの植民地化の過程を学習する中で、アシアの人々の歴史と文化の理解を深め、連帯の方向性を探っていく。

6．単元の指導計画

（1）インドの植民地化（本時）

（2）東南アシアの植民地化

（3）アヘン戦争

（4）太平天国

7．本時の目標

（1）現在のアジアを視野に入れて、植民地化＝帝国主義の問題を考える。

（2）イギリスによるインドの植民地化を、インドの視点から理解する。

（3）インドの民族運動を理解して、民族としての連帯の可能性を考える。

8．使用教材・教具

教科書　実教世界史四訂版

副教材　第一学習社：世界史資料集

プリント史料　帝国書院：世界の教科書（イギリス、インド）

あかね書房：父が子に語る世界史物語　ネルー著

新潮社：河童が覗いたインド　妹尾河童著

パネル　地図

9．本時の学習展開

	学習指導の内容	学習活動	指導上の留意点
導入 10 分	前時の復習と本時の問題設定 インドに対する認識を確認する。	イギリスにおける産業革命とインドの植民地化を関連つけさせる。今日のアシア諸国が抱えている問題を、植民地時代からの流れの中で考えさせる。 生徒のインドに対するイメージを発問を通して再確認する。 インドについて知っていることをあげさせる。 資料「河童の覗いたインド」を配布	本時の問題設定は簡潔に。 インドについて知っていることが一面的であることを理解させる。
展開 35 分	インドの植民地化の歴史をおさえる。 イギリスの教科書から インドの教科書から ネルーの手紙では インドの大反乱 （セポイン乱）	イギリスの教科書、インドの教科書、ネルーの著書、日本の教科書を比較検討しながらインドの植民地化の実像にせまる。 イギリスの教科書では、インドの植民地化についてどう書かれているか考える。 発問事項 「貿易とは具体的に何か？」 「インドの植民地化の目的は？」 帝国主義の説明と、インドの独立闘争を読む。 当時のインドの人々の様子や考えについて読み取る。 ネルーは当時のインドをどう考えていたか。 インドの封建社会が末期的であったことがわかる。 イギリス、インド、日本の教科書を比較しながら、セポイの乱がインドの民族運動の一つであったことを理解する。 この反乱によって、インドの民族運動が形成されていったことを学習する。 イギリスのインド支配がこの後大きく変化したこと。 直接支配により、イギリス領インド帝国が形成されたことを理解する。	 教師の説明にととまらず、その理由について生徒に考えさせる。 帝国主義の定義については、別の授業で詳しく解説する。 インドの人々がけっして無抵抗でイギリスの支配を受け入れたわけではないことに注意する。

整理 5 分	インドと日本との関係 インドの現状と結びつけて	日本がインドの独立運動に与えた影響について。	日露戦争の勝利によって、アジアの人々を勇気づけたが……

資料　イギリスとインドの教科書（抜粋）

帝国書院「世界の教科書」より

インドにおけるイギリス人

イギリスの教科書

イギリスの商人は，インドを征服するためでなく，東洋と貿易をするために，東インド会社を創設した(1600)。しかし，18世紀になると，会社は，特にフランス人からの攻撃に対して，その孤立した貿易拠点を確保するために戦争をしたり，若干の領土を支配したりせざるをえなくなった(第3章参照)。結果として，イギリス政府はインドの諸問題に直接的に巻き込まれることになった。1784年のピットのインド法は，東インド会社の活動の多くを監督するための監督局をロンドンに設立した。それ以上の征服活動は不必要であってほしいと望まれたが，土着の支配者からの危険や引きつづいたフランスの干渉は，それ以上の戦争を招来し，結果としてより多くの領土をイギリスが得ることとなった。1819年までにインドの征服はほとんど完了し，イギリスはインド亜大陸全体を通じて法と秩序に責任をもつこととなった。

イギリス人はまもなく，インド人の生活様式に影響を与えはじめた。たとえば，彼らは，「サティー」(亡夫の火葬用の薪の上で未亡人が生きながら焼かれる殉死)のような残酷な風習を根絶しようとした。ダルフージー卿が総督を務めた時期(1848～1856)に，安い郵便業務と電信が導入された。そして4,000マイルの立派な道路と最初の鉄道が建設された。ダルフージーはまた，村の学校での初等教育制度をはじめた。しかし，改革のペースはあまりにも急速すぎた。イギリス人は，インド人が西欧化されることを当然望んでいると考えて，多くの東洋の風習や宗教上の慣行を無視した。結果として，特に地主の間で「イギリスの干渉」に対する反対の気運が盛り上がった。彼らは，弱くて無力な土着の支配者を廃するというダルフージーの政策に反対した。西洋の知識の教育ですら，インド人をキリスト教に改宗させる方向に突き進む第一歩であると疑われた。

ダルフージーの改革によって引き起こされた一般的不安のなかで，セポイの反乱として知られる深刻な暴動が，東インド会社のベンガル軍のなかの「セポイ」(インド人傭兵)の間に起こった。そのころしばらくの間，軍の規律が乱れていた。そして1857年5月に三つの連隊に属するセポイが，命令に従わなかったために監獄に入れられた85人の仲間を釈放するために，イギリス人将校とその家族を殺害した。イギリス人にとって幸いだったことには，それに引きつづいた蜂起は国全体に広がらなかった。ベンガル軍のなかのセポイのおよそ4分の1が暴動に加わったにすぎなかった。それにもかかわらず，イギリス人は数の点で劣っていたので，大きな危険に瀕していた。反乱軍は直ちにデリーを攻略した。しかしそのとき彼らは逡巡を示し，会社の軍隊に，組織を立て直し反攻に出るための時間を与えることになった。数か月のうちに，イギリス人は支配権を取りもどした。だが，秩序が完全に復するには2年かかったのである。

その反乱を通じての両者の行動はいずれも不名誉なものであった。インド人は，降伏したイギリス人の家族を殺戮し，またイギリス人はイギリス人で，平和が公式に宣言されるまでに憎け容赦のない復讐を行った。その結果生じてきた両民族の間の憎悪と不信は，けっして完全に忘れられることはなかった。しかしながら，イギリス人は，今後彼らの西欧化政策をあまりにも推し進めすぎてはいけないということを学んだ。インドの領土のそれ以上の征服は，1858年以後は行われなかった。そして1858年に，東インド会社が廃止されて，その軍隊は王権のもとに移行された。特別の警戒態勢として，各連隊中のイギリス兵の割合は少なくとも3分の1になるようにふやされた。

ついにインドは落ち着きを取りもどして，静穏な時期に入った。その間に新たな灌漑計画や鉄道のおかげで穀物の栽培や分配が改善された。しかし，2億人以上の人口を擁するインドでは，雨が降らなかったりすると，おそるべき飢饉が生じるのはやはり避けられなかった。たとえば，1877年には少なくとも500万人の人びとが飢えで死んだ。

（省略）

インドの教科書

第9章

帝国主義

私たちの国インドが独立する1947年まで，私たちは帝国主義という用語の意味を，直接体験から知っていた。帝国主義は，一国がほかの国に従属し，独立を失うときに存在する。帝国主義下では，人民の生活は自分たちの利益によってではなく，支配勢力すなわち帝国主義列強の利益によって左右される。

すでに学んだことから，帝国主義や帝国は文明が発展したときには，世界中どこにでも共通して存在したことがわかる。本章では，19世紀末までにアジア，アフリカを帝国主義的に征服した，帝国主義の新たな波について学ぶことにしよう。（省略）

アジアの征服

インドにおけるイギリス人

インドにおけるムガル帝国の衰退が，貿易にやってきたイギリス人やフランス人に，インドを征服する機会を与えた。1600年に設立されたイギリス東インド会社は，1763年におわったフランスとの抗争に勝利をおさめた。ベンガルにはじまり，ほぼインド全国がイギリス東インド会社の統治下に入った。1857年の反乱ののち，イギリス政府がインドを直接支配するようになった。多くの藩王国が残存したが，それらの独立は事実上というより名目上のものにすぎなかった。イギリスのインド征服は完了したのである。

イギリスとフランスの東インド会社間の抗争は，貿易の独占を確立することをめぐって行われた。イギリス東インド会社が支配権を握ったのち，インドの巨大な資源は会社のものとなった。インド商品を購入するために，イギリスから貨幣を運んでくる必要はもはやなかった。これらの商品はイギリスのインド征服からつくりだされた貨幣で購入され，イギリスとヨーロッパで売却されたのである。会社の社員はひとかど以上の財産を築いた。インドはイギリス帝国の最も輝かしい宝石として知られるようになった。イギリスにおける産業革命の開始とともに，イギリス製品はインドになだれこんだ。これはインドの手工業を壊滅させた。数百万ポンドという富が利潤という形で，またイギリス政府への支払として，インドからイギリスへと流出した。インドの利益はますますイギリスの利益に従属していった。1877年には，イギリス女王はかつてムガルによって使用されていたのと同じ「インド女帝」の称号を称するに至ったのである。

イギリスによる征服の結果，インドの社会・経済生活に多くの変化が生じた。イギリス商品のためのインド市場を拡大し，インドの自然資源を利用するために，鉄道建設が大規模に開始された。イギリス人支配者は自分たちの農園主に特権を与えた。こうしてまたたく間に多くの茶・コーヒー・藍のプランテーションが発展したのである。1883年には，すべての輸出入税は廃止された。インド人の人的，物的資源は，中国，中央アジア，アフリカにおいて，イギリス帝国主義の利益をあげるために利用された。インド人民の反抗を防ぐために，イギリス人は世論の自由を制限した。彼らはインド人を政府の責任ある地位から排除し，ほかの諸制度や社会生活においても彼らを差別したのである。

第15章

インドの教科書

インドの独立闘争

外国支配から自分たち自身を解放するためにインドの民衆により遂行された英雄的な闘争は，じつはインドにおける民族主義の発生と発展の結果によるものであった。インドの民族主義はイギリス支配によりつくりだされた諸条件の結果として19世紀に誕生したものである。イギリス支配はイギリスの支配階級の利益に奉仕することだけを狙いとしていた。これがイギリス政府とインド民衆との間の根本的な反目の理由であった。

民族主義の発生は世界全域での人間社会の発展に明確な段階を画するものである。イギリスによる征服はその内部的な諸過程をつうじてインド社会の進化を崩壊させてしまった。民族主義は，したがって外国支配によりつくりだされる諸条件のもとで帝国主義者の征服の犠牲者となった他の諸国の場合とどうように，インドに生まれたのである。民族主義が発展するとともに，インド民衆の諸要求はますます民族主義的な性格をおびた。政治権力への参加要求にはじまり，それは完全独立を目ざす闘争へと発展した。闘争の性格もまたしだいに変化した。少数の教育を受けた人びとによる合法的な運動にはじまり，それは徐々に，平和的ではあるが合法的ではない，圧倒的な多数のインド民衆の革命闘争に転じた。政治的独立の闘争ということのほかに，それは民主主義と社会的な平等を基礎とするインド社会の復興のための闘争にもなったのである。

1857年の反乱

イギリスの征服の開始直後から，インドの民衆はその政治的な従属に心ならずも従ったのではけっしてなかった。インドのあれこれの地方で，イギリス支配に対する武装した抵抗がない年は一年たりとも存在しなかった。イギリス支配の根幹を揺るがした，諸反乱のさいたるものは1857年に起こったのである。

この反乱は1857年5月10日にメーラトで，インド駐在のイギリス軍インド兵の蜂起ではじまった。それはイギリスによる征服の開始以来，蓄積された怒りの結果であったが，油を塗った薬莢事件により反乱の口火が切られた。事実，反乱の諸理由はこれ以上に根深いものがあった。

皆さんは前章でイギリス支配の社会的・経済的な重大性について，学習してきた。農民はその土地を奪われてしまい，職人も破滅してしまった。イギリスの領土併合政策は当時の多くのインド人支配層を土地から追いたててしまった。その結果，不満は広範囲に広がった。総督としてインドにきたタルハウジーは8年間の在任期に新しく8藩王国を併合した。さらにイギリス政府は強制的にインド人をキリスト教に改宗することを求めているのではないかという危惧感が多くのインド人の間にあった。イギリス政府がインド人の宗教上の信仰にほとんど関心を払っていないことは，軍隊での油を塗った薬莢の使用といった事実からも明らかである。かくてイギリス政府は巨大な数にのぼる民衆――旧支配層と一般民衆――との間に不和を生じさせ，怒りはみるみるうちに増大していった。1835～1836年にインド総督であったメトカーフ卿は次のように書いている。「全インドは絶えずわれわれの没落を見守っている。いたる所で民衆はよろこぶだろう，いいかね，彼らはわれわれの破滅をよろこぶのだよ。そして，必ずや自己の力でそれを推進する人間に事かかない状態である」そして20年余りして，反乱は発生したのである。

（省略）

本場インドのカレーだよ

私たちが日常食べているカレーって何なんでしょう。本場インドの〝カレー〟を見てみましょう。

ジャナキお婆さんの台所で、うまそうな匂いを嗅いで腹の虫が鳴った。ホテルや高いレストランのカレーより、きっと家庭で彼らが食べているカレーの方が、ウマイのではないか、とヒガム。

〝インドへ来た以上、各地のカレーを食べてみよう〟と毎日毎日カレーばかりを食べ続けていた。特に好物というわけではないので、なかばヤケクソのような感じで食べるときもあったが…。味が全部微妙に違ったので、ついつい興味を持って食べ続けていたわけだ。

『インド』といえば『カレー』をすぐ連想するほど、イメージ的にも密着しているが、それゆえの誤解もまた多い。『カレー』は、インドでは一種類の料理ではないし、日本で市販しているような、カレー粉やルーを溶かすものでもない。ここでは、幾種類ものスパイスを臼でひいて混ぜ合わせたものを『マサラー』といっているが、その調味香辛料のことを指している。俗にいう〝カレー味〟ではあるが、決して一色の味ではない。それは醤油で味つけしても、同じ味の料理にはならないのと似ている。さらに料理の材料が違えば、味が変わるのは当然である。その上『マサラー』のブレンドの仕方で、味は千変万化する。その味の違いは、それこそ一口では表現できない。

当然、北と南の地域差もあれば、各家庭での個性的な〝それぞれの家の味〟の違いもあるわけだ。

各家庭の味は無理としても、せめて、この町の人達が日頃食べているメシ屋で食べてみたい、と思った。

ぼくが、ここに着いた日から、フォンディエンというリキシャ・マンが、自分勝手に専属のドライバーになりきって、ぼくが乗っても乗らなくても、とにかくつきまとっていた。その若者に、いってみた。

「君が食べに行く店に連れて行ってくれないか、きっと安くてウマイのだろう？」ところが、彼は、

「日本人のゲストを連れていくレストランではない」

と、あまりいい顔をしない。理由は、

「キレイな店じゃないし、食器の皿もないから……」

という。

「皿がない？」

「バナナの葉が皿なんだ」

「行きたい！〟南へ来たらぜひバナナの葉の皿で〟と思っていたんだ。君の分はおごるから連れていってくれ」

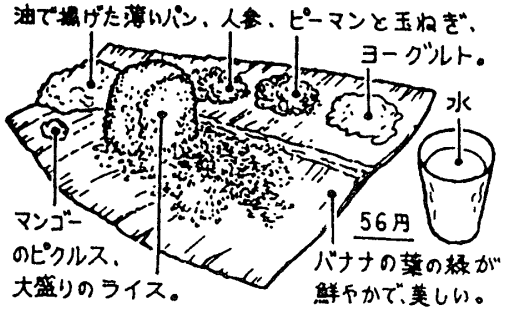
と頼む。フォンディエン君は急に威勢がよくなり、「リキシャに乗れ」という。乗るほどの距離ではなかったが、その店は『ティルマライ・ナーヤカ宮殿』のすぐ前にあった。カウンターの親父に2.25ルピー（56円）払ってチケットを買い、2階へあがる。各地で安いメシ屋に入ったが、ここはバカ安だ。客も土地の人ばかりだった。

まず水道の水で手を洗う。みんなそうしていた。

テーブルの上にバナナの葉が、2つ折りに置いてあった。それを自分の前に広げる。アルミのコップの水を、葉の上にたらして掌でこする。つまり清めるわけだ。水でビショヌレになった葉に、給仕さんが、色々なオカズをすくって配食して歩く。ライスは大丼一杯に固めたものを、ガバッと盛りあげてくれるが、その量の多さに驚く。ライスの山を半分崩すと、野菜カレー（サンバ）をかけてくれる。それを右手の3本の指先でこね、口へ運ぶわけだが、彼らは指の第2関節より上は汚さない。

フォンディエン君（24歳）

ぼくも、ずっとフォークやナイフを使わずに、手で食べ続けていたが上手にならない。こねまわしているうちに、第3関節はおろか、手の甲までグチャグチャに汚れてしまう。でも、手で食べるのは楽しい。インドの人は、まず指で味わうという。寿司やオニギリだって手で食べた方がオイシイのと同じである。その楽しさに加えて、インドでは食事の清潔さを保ち、ケガレが口から入ることを防ぐために、手で食べるのだ。誰が使ったかわからないフォークやナイフより、自分の手の方が信用できるわけである。食器にしても「一回だけのバナナの葉の方がキレイだ」という。インド的な〝浄・不浄〟観が表われている。



㊟ 結婚式披露宴やパーティーなどの正餐も、バナナの葉に料理を盛る。だから、バナナの葉は貧しい人の皿ではない。